

連体節における「ハズダ」についての一考察

李 貞 姫*

(e-mail: halfmoonlee@hanmail.net)

目 次

1. はじめに
 2. 先行研究の検討
 3. 内の関係にある連体節の場合
 - 3.1 「ハズダ」の文末モダリティとの関係
 - 3.2 連体節における「ハズダ」の文脈的展開
 - 3.3 限定の仕方
 4. 外の関係にある連体節の場合
 - 4.1 「トイウ」が介入しない場合
 - 4.2 「トイウ」が介入する場合
 5. まとめ
-

1. はじめに

一般に「ハズダ」は、ある根拠から論理的帰結によって導かれる結論を述べるものであり、モダリティ形式の内、疑似性¹⁾・事柄的度合いが高く、連体節の述語になりうるとしている。「ハズダ」による連体修飾表現は、内の関係²⁾では意味・用法によって容認度が異なる。また、文末モダリティと

* 慶北大学校 日語日文学科 講師、日本語学

1) 疑似性とは、仁田(1991, pp.52-59)にしたがったものである。仁田は、モダリティを形式自体のあり方によって大きく二つに分け、真性モダリティと疑似モダリティに分けている。その基準は①過去になるかどうか、②否定になるかどうか、③話し手の心的態度のみを表すかどうかであるとしている。したがって、疑似モダリティとは、過去形にも否定にも話し手以外の心的態度の言及にもなりうるものである。

a 真性モダリティ: 「ダロウ」「マイ」

b 疑似モダリティ: 「ソウダ」「ヨウダ」「ラシイ」「カモシレナイ」「ニチガイナイ」「ハズダ」

2) 寺村(1993, pp.195-196)は、連体節と主名詞(底の名詞)との関係を大きく「内の関係」「外の関係」の

は異なる様相を見せており、その多くが現状と話し手の判断が食い違う場合に用いられるようである。しかし、食い違いの有無による文脈的展開、及び限定の仕方については疎かに扱われている。例えば、[1]a、[1]bは共に食い違いを表す文であるが、[1]aは推論と現状が相反する一方、[1]bは連鎖的な推論による付帯状況と現状が食い違うようである。

- [1]a 本来閉じているはずのバルブが開いていたと説明。 (朝2013.2.22(ビ))
 b 火をこわがるはずのサルたちが、たき火を囲んでポカポカ!? (朝2013.2.20.(ラ))

さらに、食い違いの有無は限定の仕方にも影響を及ぼし、限定的ものと非限定的ものを区別する。一方、外の関係では「トイウ」の介在有無、主名詞の意味特性で「ハズダ」の容認度が異なるなど、「ハズダ」が用いられた連体節の文脈的状况をもう少しきめ細かく分析する必要がある。

そこで、本稿では先行研究を踏まえた上で、具体的な用例の検討を行い、「ハズダ」を含む連体節の容認度を考察する。この際、連体節と主名詞の意味関係によって、言わば「内の関係」と「外の関係」に分け、主名詞の意味特性、「トイウ」の介在可否などを考察して容認される具体的な構文的条件を検討する。

2. 先行研究の検討

連体節における「ハズダ」の容認度に関する研究には奥津(1974)、寺村(1993)、三原(1995)、太田(2002)が挙げられる。

- [2]a 今月中に書きあがるはずの原稿
 b 確か万博に行かなかったはずの彼 (奥津(1974, p.57))
 [3] 誰でも知っているはずの事実 (寺村(1993, p.250))

まず、奥津(1974)は[2]a、[2]bをあげ、「ハズダ」が連体節の中に容認できるとしている。奥津は「ハズ」の意味を考えてみれば、単に主観的な確信を表すのではなく、ある事柄がそのように決まっている、というような客観的な状態の表現とも考えられるとすれば、辞的表現³⁾ではなく、

二種類に分けている。「内の関係」とは、連体節の述語と主名詞の間に特定の格関係が成り立つもので、例文[1]に見られるように「男がさんまを焼く」という形に戻せるものを言う。これに対して、「外の関係」とは、連体節が底の名詞の内容を述べたり、あるいはその内容を補充するもので、例文[2]のように格関係を持った形に戻せないものを言う。

- [1] さんまを焼く男 … 「内の関係」
 [2] さんまを焼く匂い … 「外の関係」

3)奥津(1974, p.42)は、連体節に含まれるか否かを詞・辞の弁別の基準にしており、連体節に入りうる要素を詞、入

詞的表現と解してきつつかえないとしている。寺村(1993)も「ハズダ」の容認性を認めている。

次に、三原(1995)は内の関係にある「ハズダ」は連体節の中に生起可能であるとしている。三原は判断確定性⁴⁾という概念を提示して、内の関係にある「ハズダ」の容認度を説明している。「ハズダ」の基本的意味を自分が知っている事実Pから推論すると当然Qであること、つまり、得られた結論が客観的・正当な事実から推論された、十分あり得る結論であることを示すものと定義した上で、「ハズダ」の判断確定性は主観的確定であるとし、連体節との親和性が高いとしている。

[4]a 月末に入るはずの金

b どう転んでも勝てたはずの試合 (三原(1995, p.289))

しかし、奥津(1974)、寺村(1993)、三原(1995)は連体節における「ハズダ」の容認性は認められたものの、どのような文脈状況下で容認されるのか、容認される具体的な構文的条件については明らかにしていない。また、後接する表現によっては、文末モダリティとは異なる意味の食い違いになりうることにしても言及されていない。

また、太田(2002)は「ハズダ」を用いる表現とは本来、話し手の思考過程における判断を示すものであり、その〈思考過程内の判断〉と〈現実〉との関係によっていくつかの意味機能が生じるものであると指摘した上で、連体修飾用法の場合、文末とは違い、そのほとんどが主節の内容と食い違いが生じる解釈となると述べている。しかし、「ハズダ」の全体的な意味・用法を視野に入れながら、文末モダリティとの相関関係について再検討の余地がある。食い違いの有無と限定の仕方との関わりについても疎かに扱われている。また、内の関係に立つ「ハズダ」が対象になっており、外の関係を含む連体節における「ハズダ」の全体像を探るまでには至っていない。

[5]a いないはずの航空母艦がいた。

b 合格はずの受験生16人を不合格としたことを明らかにした。 (太田(2002, p.69))

3. 内の関係にある連体節の場合

連体節の述語と主名詞の間に特定の格関係が成り立つものである、言わば内の関係にある連体

りえない要素を辞に分けている。詞は客体的素材の概念化による表現で、名詞・副詞・動詞・形容詞・格助詞・助動詞などは詞に当たるのに対して、辞は言語主体の意志・情緒など、主観的作用の直接的表現で、文頭詞・文末詞に属するものは辞に当たるとしている。

4)三原(1995, p.290)における判断確定性とは、話者による判断が完全確定であるか完全未確定であるかを両端として、その間にスペクトル的に推移する判断の度合いである。それはあくまでも「判断」確定性であって、「事実」確定性ではない。話者が判断を下すにあたって、その判断が話者の意識の中でどの程度確定的ととらえているかをめぐる概念である。判断確定性が高い概言のムードほど連体節と親和性が高いと述べている。

節を取り上げ、述部にある「はずだ⁵⁾」(の変化形はず)の容認度を検討する。

3.1 「はずだ」の文末モダリティとの関係

まず、主名詞との関係を取り上げる。内の関係における連体節で「はずだ」が用いられると、主名詞として、一般名詞、代名詞、固有名詞が制限なく使われる。

- [6] その次にUPSから届いたはずの届け物はきちんと置いてある。 (朝2012.12.26(ラ))
 [7] だが、死んだはずの彼が次に目を覚ますとそこは見知らぬ農村だった。 (朝2012.1.30(文))
 [8] ペニテス監督は、後半のスタートからマリンを下げ、本来であれば休養を与えたかったはずの
マタを投入する。 (朝2013.1.28.(ス))

ところで、主名詞に制限がないものの、連体節での「はずだ」の意味は一樣ではないようである。[6]は、自分の推論では当然「UPSから届いた」と予想しているのに対して、[7][8]では、「はずだ」によって導かれた推論とは矛盾する事態が後接している。

連体節における「はずだ」の容認度は意味・用法によって異なる様相を見せており、文末モダリティとしての意味の特徴が深く関わっていると考え、まず「はずだ」の基本的意味を分析する。高橋(1975)は「予定や推定など決まりや確さの見込みを表す用法(=みこみ)」と「なるほどそういうわけだ」という道理のさとりを表す用法(=さとり)」に分けており、寺村(1984)で説明のムードとして取り上げられている「はずだ」の用法もこの二つと重なっている。また、森田(1980)はこの二つの用法に加え、「条件から当然の帰結が現状と食い違っている場合」があることにも言及している。奥田(1993)はこれらを踏まえつつ、判断の主体やテンスとからめて「思い込み」「予定」「さとり」などに分類している。連体節における「はずだ」は現実と予想が食い違う場合が多く、その現れ方を分析するには、森田の分類が適していると考え、それにしたがい、連体節との関わりを検討する。

森田は「はずだ」の有する基本的意味は、客観的な条件・状況からして、その事柄が当然であるべき状態であるという判断と定義づけ、[9]a～[9]cの検討からその意味・用法を三つに分けている。本稿ではこれらを予想用法、食い違い用法、さとり用法と呼ぶことにする。

- ①条件から当然の帰結として予想する場合～(予想用法)
- ②条件から当然の帰結が現状と食い違っている場合～(食い違い用法)
- ③条件の真相を知って、現状が当然の帰結であったと悟る場合～(さとり用法)

[9]a 北海道は今、雪が降っているはずだ。

5) 「はずだ」の形で文末に用いられるほか、「はずだった、はずがない、はずが、はずの」など、いくつかの形式があるが、本稿ではこれらを「はずだ」の表記で代表させる。

- b 今年は狂っている。例年なら七月といえどもっと暑くていいはずなのに。
- c この問題はミスプリントがあるんだって。なんだ、それじゃ解けないはずだ。

(森田(1980, pp.410—411))

3.1.1 予想用法

森田によると、「ハズダ」の予想用法は、真相はまだ未知の段階で、条件から当然の帰結として、まちがいに…であると予想するものの、その裏には予想した解答に対する話し手の自信と、その解答がはたして正しいかどうか未確認・未証明である意味合いが含まれているとしている。

例えば、[10]a～[13]aは文末モダリティとして予想用法を示す。[10]b～[12]bのように、連体節の構造にしても真実のところはわからないが、話し手の理解する諸条件からの当然の帰結として、まちがいに「イナ・ブルスカアヤはカルメンに扮する」「正誤表はファウスト考に添える」「課長は書類を出す」と予想する判断を示している。[13]bも「命は助かる」と、ある程度確信を持って出された判断を元に後件の事態がつかまっている予想用法を示す。

- [10]a イナ・ブルスカアヤはカルメンに扮するはずだ。
- b 僕はカルメンに扮するはずのイナ・ブルスカアヤに夢中になっていた。 (カ)
- [11]a 正誤表はファウスト考に添えるはずだ。
- b…、杉君と向君との指摘せられた誤訳は両部を合併して、ファウスト考に添えるはずの正誤表にだけ載っている。 (不)
- [12]a 書類は課長に出すはずだ。
- b縁側に出て顔を洗いながら、今朝急いで課長に出すはずの書類のあることを思い出す。 (あ)
- [13]a 命はたすかるはずだ。
- b 助かるはずの命を救おう。 (www.city.omuta.lg.jp)
- c 助かるはずの命が助からない。 (www.djp.or.jp)

連体節で予想用法は容認されるものの、その出現頻度も低く、採集した用例、計128のうち11例に過ぎない。それは、[13]cで見られるように「助かるはずの命」に後接するのは一般的に助からないという発想がなされるためではないだろうか。「ハズダ」が用いられた連体節は文末モダリティとは異なり、このように現実と話し手の判断が食い違う場合が多いようである。これについては3.1.2で取り上げる。

3.1.2 食い違い用法

森田によると、真相が既知の段階で「ハズダ」が用いられると、既知となった現実が予想と食い違うところに〈こんなはずではない。予想や約束と違う〉不可解・不信の念が生まれるとしている。主

に「…はずかない／…はずだが」など、否定や逆接表現となる。

例えば、[14]aの場合、ある時間に金さんが来ることになっているのに、まだ来ていないことが確認されている中での表現である。金さんがまだ来ないことに対する驚きや疑問などが表されている。[15]aでも、バルブは閉じていると思っていたものが現実には開いていることに対する意外性を示す。一方、[14]b～[18]bで見られるように、連体節の構造にしても食い違いの意味は変わらない。後件にはやはり「来ない」「開いていた」「次々と抜ける」など、「ハズダ」で示された判断とは食い違う展開が予想されており、現状が話し手の判断通りにいかずに生じた食い違いに対する意外性や、残念・不満な気持ちが表される表現となる。つまり、「ハズダ」によって導かれた推論と後件の現実事態が食い違っており、「ハズダ」による判断が未実現されたことを意味する。採集した用例⁶⁾、計128のうち117例が食い違いを表しており、多数を占めている。

- [14]a そろそろ金さんが来るはずだが、遅い。
 b 来るはずの金さんがまだ来ない。
- [15]a バルブは本来閉じているはずだが、開いている。
 b 本来閉じているはずのバルブが開いていたと説明。 (朝2013.2.22.(ピ))
- [16]a ボルトは抜けないはずなのに、抜けている。
 b 抜けないはずのボルトが次々と抜ける。 (朝2013.2.2(社))
- [17]a 本来命が助かるはずだが、失われています。
 b 本来助かるはずの命があまりにも多く失われています。 (朝2013.3.16.(情))
- [18]a 上り電車に乗るはずだが、電車は出て行く。
 b 電車の駐車場の近くへ来ると、ちょうど自分の乗るはずの上り電車が出て行くのが見えた。 (停)

3.1.3 さとり用法

これは、「P(前提)→Q(結論)ハズダ」⁷⁾という構造を持つ文において、Pなら当然Qだと了解される、そういう事実を知ったという状況で使われるものである。この場合、必ず前後に前提となるPが現れており、その論理が成立する理由・背景を知った上で「ハズダ」による判断が成される。

例えば、[19]aでは、「dameは現地語で平和という意味」という前提Pがあり、「(だから)→ニコニコしているはずだ」という結論Qが現れる構造になっている。[20]a、[21]aでも、必ず「(だから)→答えを選べなかったはずだ」「(だから)安いはずだ」と当然の帰結としての現状を表す構造をとっており、常に文末で用いられる。したがって、「はずだった」と過去形になったり、連体節として用いられたりすることはできない。

つまり、「ハズダ」がさどりの意味として用いられる場合には、連体節では容認されない。

6) 用例はインターネット「asahi.com」の新聞記事、青空文庫の中から計128例を採集した。

7) 寺村(1984, p.266)にしたがった記号である。

- [19]a そうだった！「dame」は現地語で「平和」という意味。道理でニコニコしているはずだ。「駄目」と言うときは「keta！」だった。 (朝2012.11.10.(マ))
- b* 道理でニコニコしているはずだった。
- c* 道理でニコニコしているはずの現地人。
- [20]a この段落を丸ごと見逃してしまった！どうりで確信を持って答えを選べなかったはずだ。 (oshiete.goo.ne.jp)
- b* どうりで確信を持って答えを選べなかったはずだった。
- c* どうりで確信を持って答えを選べなかったはずの受験生。
- [21]a 革製じゃないのか。道理で安いはずだ。
- b* 道理で安いはずだった。
- c* 道理で安いはずのかばん。

以上の検討をまとめると、連体節における「ハズダ」は予想用法では容認されるものの、出現頻度が非常に低く、食い違いの意味を持つタイプが多数を占めている。さとり用法は容認されないことがわかる。

3.2 連体節における「ハズダ」の文脈的展開

連体節における「ハズダ」の用例を分析した結果、計128例のうち117例が現状と何らかの不一致を抱えており、11例は食い違いがないものを表している。ここでは食い違いの有無に焦点を当て、文脈的にどのような展開を見せるのかを考察する。

3.2.1 推論の帰結と現状に食い違いがあるもの

真相が既知の段階には、そのほとんどの場合、推論の帰結と現状に食い違いがあり、後件には「ハズダ」による判断と矛盾する事態が示される。採集した用例128例のうち117例に何らかの食い違いが現れる。用例を検討してみると、「ハズダ」は推論の課程よりもむしろ結果を重視し、推論の結果や付帯状況と、それに対応する現状との関わりを強く意識している表現のように思われる。その関わり方は、推論と現状が相反するもの(Aタイプ)と、連鎖的な推論によるその後の展開が食い違うもの(Bタイプ)の2種類に分けることができる。これによって、前提から推論して結論が出、その時点で付帯状況やその後の展開を予測するという思考の流れと現実事態との関係を明らかにすることができよう。

Aタイプ：推論の帰結が現状と相反するもの

「Qハズ/N」という構造を持つ文で、Nの現実事態がQとは反対の結果、すなわち \bar{Q} となった場合である。[22]で見られるように、推論では「抜けない」と判断したのに、その判断とは相反して、現状には「抜けている」の事態になっている。また、[23]～[25]でも推論とは矛盾する事態である

「開いている」「無くなっている」「ミスしている」の現状になっている。採集した用例128例のうち30例がAタイプに属する。

- [22] 抜けないはずのボルトが次々と抜ける。 (朝2013.2.2(社))
 →ボルトは抜けないはずだ。
 ボルトが抜けた。 (現実事態： \bar{Q})
- [23] 本来閉じているはずのバルブが開いていたと説明。 (朝2013.2.22.(ヒ))
 →バルブは閉じているはずだ。
 バルブが開いていた。
- [24] 大量にあったはずのがれきも無くなっていた。 (朝2012.12.11(教))
 →がれきは大量にあったはずだ。
 がれきが無くなっていた。
- [25] 普段は解けるはずの問題をミスしている場合は理解に抜けかある可能性があります。 (朝2012.12.12(教))
 →問題は解けるはずだ。
 問題をミスしている。

Bタイプ：連鎖的な推論による、その後の展開や付帯状況・実体などの現状が自分の予想と食い違っているもの。

「Qハズ/N」という構造を持つ文で、Nは確かにQではあったが、「Qであるなら当然Rだ」と想定されるそのRが否定されるものである。「{QならばR}はずだ」のRの部分内在されており、{QならばR}という話し手の判断が成立しなかったことを示す表現である。[26]で見られるように、「さるは火をこわがる」「火をこわがるなら、たき火を囲まない」という連鎖的な推論とは異なり、実体は「たき火を囲んでいる」事態になり、自分の判断と食い違う結果になっている。[27]、[28]でも「絶滅したなら、見られない」「慣れているなら、命を落とさない」はずなのに、現実にはその想定と食い違う事態が後件で示されている。採集した用例128例のうち87例がBタイプに属する。

- [26] 火をこわがるはずのサルたちが、たき火を囲んでポカポカ!? (朝2013.2.20.(ラ))
 →サルは火をこわがるはずだ。 : 「Nは確かにQだ」
 火をこわがるなら、たき火を囲まないはずだ。 : 「{QならばR}はずだ」
 現実には、たき火を囲んでいる。 : (現実事態： \bar{R})
- [27] 絶滅したはずのカワウソ、見たってホント? (朝2013.1.29(特))
 →カワウソは絶滅したはずだ。
 絶滅したなら、見られないはずだ。
 現実には、見た。

[28] 慣れているはずの風雪に、北海道の人たちが命を落とした。 (朝2013.3.4(地))

→風雪になれているはずだ。

慣れているなら、命を落とさないはずだ。

現実には、命を落とした。

3.2.2 推論の帰結と現状に食い違いがないもの：Cタイプ

現状が未知の段階で用いられる場合で、少数ながら存在する。採集した用例128例のうち11例がCタイプに属する。この場合、推論を試みたものの発話時にはまだ現状が未知の段階であって、推論の結果がどう現状とかわかっていくのか、その後の展開が見えていないものである。話し手はある程度の確信を持って考えているという内容が「はずだ」によって示され、それによって名詞が修飾されている。

例えば[29]では、「はずの」が使わなければ、確認された既定の事実を表すことになる。「はずの」があることで「届け物がUPSから届いた」ことは、自分が知っている事実の元で推論すると、確言的には言えないが、ほぼわかりきっていることを意味する。単に、まだ未知の段階なので確認ができていない状況であることを示す。

[29] その次にUPSから届いたはずの届け物はきちんと置いてある。 (朝2012.12.26(ラ))

[30] 震災前につくられたはずのこの曲が、会場でひととき厳かに希望のメッセージを帯びて響いた。
(朝2013.3.14(社))

[31] メインの購入層となるはずのこの世代にどうやって住宅を売り込んでいくかが不動産会社生き残りのカギになっている。
(朝2013.2.7(国))

[32] 二人にとっても大きなターニングポイントになったはずの本作は、ファンならずとも必見なのだ。
(朝2013.2.22(エ))

[33] スゴ腕のジャックはすぐに前科のある男マーキーを捕らえるが、事件の裏側に金に狂ったギャングや同業者、さらには仕事を依頼したはずのエージェントの思惑もがうごめいていることが発覚。
(朝2013.1.8.(エ))

以上、連体節の述部に「はずだ」が用いられると、既知の段階では、ほとんどの場合、推論の帰結と現状に食い違いが生じており、後件に矛盾する事態が続く。一方、未知の段階では食い違いが生じないことがわかる。

3.3 限定の仕方

連体節の表現には限定的なものと同非限定的なものが区別できる。特に、益岡(1997, p.167))は、限定的連体節表現と同非限定的連体節表現に分けており、次のように述べている。

[a] の株は証券マンがすすめる特定の株を問題にしており、株という指示対象が限定される。これに対して、[b]では、最初は丁寧に答えていたという連体節は麻知子という主名詞を限定していない。連体節の有無にかかわらず、麻知子という指示対象は一定している。

[a] 証券マンのすすめる株を買っても必ずしもまくゆくものではない。一限定的連体節

[b] 最初は丁寧に答えていた麻知子も、次第に疲れてきた。—非限定的連体節

益岡によると、限定的連体節のほうは主名詞の指示対象を限定する一方、非限定的連体節の働きは情報付加であり、大別して、主節で表される事態に対する情報付加と主名詞に対する情報付加の2つの系列があるとしている。本稿では益岡の分類にしたがい、「ハズダ」が用いられた連体節における限定の仕方を分析する。

連体節に「ハズダ」が用いられると、推論の帰結と現状に食い違いがあるかないかによって限定の仕方が異なる。例えば、[34]a、[34]bは共に食い違い用法を表す。[34]aでは、連体節で表されている「ボルト」の状況が主節で表されている状況と対比されている。また、[34]bでは、連体節の「火をこわがるはずだ」という事態は主節の「たき火を囲んでポカポカ」という事態に対して対立する関係にあると言える。この場合、連体節は「ボルト」や「サル」という主名詞の指示対象を限定するのではない。主節の現実事態に対して、話し手の推論による情報を付加する役割をしており、推論通りにいかずに生じた現実に対する驚きや意外性を示す。つまり、食い違いがあるものは、連体節で表されている状況が主節の状況と相反しており、対比される関係を成す非限定的連体節表現となる。

一方、[35]a、[35]bのように、食い違いがないものは、限定的連体節表現となる。「UPSから届いた」特定の届け物、「震災前につくられた」特定の曲を問題にしており、「届け物」「曲」という主名詞の指示対象が限定される。

- [34]a 抜けないはずのボルトが次々と抜ける。 (朝2013.2.2(社))
 b 火をこわがるはずのサルたちが、たき火を囲んでポカポカ!? (朝2013.2.20(ラ))
 [35]a その次にUPSから届いたはずの届け物、きちんと置いてある。 (朝2012.12.26(ラ))
 b 震災前につくられたはずのこの曲が、会場でひときわ厳かに希望のメッセージを帯びて響いた。 (朝2013.3.14(社))

つまり、食い違いがある場合には非限定的連体節表現となり、主節の事態に対する情報付加を表しており、主節とは「対比・逆接」の関係になる。一方、食い違いがない場合には、限定的連体節表現となる。

4. 外の関係にある連体節の場合

本節では、連体節が主名詞の内容を述べたり、あるいはその内容を補充するものである、言わば外の関係にある連体節を取り上げる。

4.1 「トイウ」が介入しない場合

外の関係の修飾表現においては、連体節が主名詞に関する説明を与えるのであるから、当然の帰結として、主名詞は何らかの説明を要求するタイプのものに限られる。寺村(1993)の分類⁸⁾にした

がい、後接する主名詞の種類を検討する。

インターネット「asahi.com」の新聞記事から、寺村で分類されている主名詞が後接する用例を検索した結果、「トイウ」の介入なしに「ハズダ」が用いられる用例は見当たらない。[36]～[43]で見られるように、連体節の述部に「ハズダ」が用いられると、主名詞として発話・思考名詞、コト名詞、感覚名詞、相対性名詞の後接は容認されないことがわかる。

- [36]* 大学進学を保証するはずの申し出を受けた。
- [37]* 全てを懸けるはずの気持ちで闘いたい。
- [38]* 学生数千人が避難するはずの騒ぎとなった。
- [39]* 近くの住宅地にチラシを配るはずの仕事をはじめました。
- [40]* 花子と呼ぶはずの声が聞こえる。
- [41]* 猫に近づくはずの様子が写っている。
- [42]* 学校へ行くはずの前にご飯を食べる。
- [43]* 嘘をついたはずの罰として掃除をした。

一般的に、連体節におけるモダリティ要素の容認度は、内の関係より外の関係で高い。しかし、「ハズダ」の場合、内の関係では現れうるのに対して、外の関係では「トイウ」の介入なしに容認されない。

では、このような現象はなぜ起るのだろうか。外の関係にある連体節は主名詞の内容を述べたり、あるいはその内容を補充する働きをする。しかし、3.1で指摘したように、連体節における「ハズダ」は主に食い違いの意味に使われており、主名詞の内容補充を要求する外の関係の成立の契機と矛盾するので容認されないのではないかと考えられる。

4.2 「トイウ」が介入する場合

外の関係の場合、陳述と関連がある要素「ハズダ」が連体節の内部に用いられると「トイウ」の介入が要求される。前節で確認されたように、「ハズダ」は「トイウ」の介入なしでは容認されないことから、外の関係において「トイウ」の介入は必須であることがわかる。

- [44] 血のつながりがなくても、他人であっても家族のようなつながりができるはずだという意見だ。

(朝2012.5.18(マ))

8) 寺村(1993, pp.269-296)は、主名詞の意味特性によって、発話・思考名詞、コト名詞、感覚名詞、相対性名詞と四つに分けている。

- ①発話・思考名詞 : 言葉、手紙、電報、噂、申し出、思い、考え、意見、気持ち、…
- ②コト名詞 : 騒ぎ、事実、仕事、事件、記憶、習慣、風習、過去、運命、…
- ③感覚名詞 : 声、音、匂、味、感じ、様子、姿、有様、…
- ④相対性名詞 : 上、下、前、後、翌日、背後、中、反面、原因、結果、罰、…

- [45] 視聴率の低迷する「平清盛」について、松本正之会長は「もっと見てもらえるはずだという気持ちがある」と、今後への期待を示した。(朝2012.6.7(エ))
- [46] 共通のルールが通用するだろう、相手もそれに従ってくれるはずだという期待と、相手を他者として尊重することは、究極的には両立しない。(朝2011.1.7(社))
- [47] 逆に「シレンマ」を強化することができるはずだという発想を得ることができるようになる。(朝2012.7.8(社))
- [48] 数日後にSPEEDIが試算ができるはずだという情報があったので…。(朝2011.5.20(特))
- [49] 底に流れているのは、女性は子どもを産みたいはずだという前提への疑問である。(朝2004.5.16(エ))

「トイウ」が介入すると、[44]～[49]で見られるように、主名詞として、発話・思考名詞とコト名詞が後接しており、「意見」「気持ち」「期待」など、主に思考名詞が後接する。「ハズダ」は確言的とは言えないが、自分が知っている事実から推論する結果を述べる表現なので、主に「思考名詞」が後接すると考えられる。主な主名詞には、次の【表1】のようなものが挙げられる。

【表1】「ハズダ」に後接する主名詞の種類

発話	発話名詞	メッセージ
・思考 名詞	思考名詞	意見 気持ち 期待 発想 認識 観念 確信心構え 見解 ビジョン 思い 予測
	コト名詞	制度 対策 情報 前提

また、外の関係で用いられた「ハズダ」はいずれも予想用法を示す。外の関係において連体節は主名詞の内容を補充する役割をする。例えば、[44]では、自分の知っている客観的事実に基づいて推論すると当然「他人でも家族のようなつながりができる」と予想することが主名詞「意見」の具体的な内容として用いられている。[45]～[49]でも、連体節は「当然の帰結として～と予想されること」が主名詞「気持ち」「期待」「発想」「情報」「前提」の内容として示されている。

次に、主名詞として「こと」「ところ」のような形式名詞が使われている場合を取り上げる。

- [50] ミランが素晴らしいチームに戻るはずだということは、私も以前から言っていたはずだ。(朝20012.11.17(ス))
- [51] これは基本的に、「Windows7」用のアプリケーションを実行できるはずだということを意味する。(朝20012.10.10(経))
- [52] そのため、混合診療全面解禁も反対だが、医療費負担増も反対だというとき、人々の矛先は「どこか(自分ではない)他のところにお金があるはずだ」というところに向かいます。

(www.mext.go.jp)

[53] 逆に、科学社会学者たちは、パラダイムが共軛不可能であれば、パラダイム選択に際して社会的な要因が関与するはずだということから、科学社会的論議を開始したのであった。

(hiroshima-u.ac.jp/nkaoru/Joukyo.html)

主名詞には実質性が高いものから希薄なものへとならびがある。[50]～[53]では、「話」「事実」のようなコト名詞が希薄化、形式化して「こと」「ところ」に替えられたと考えられる。

5. まとめ

連体節の述部に現れる「ハズダ」に注目し、その容認度について考察を試みた。そこから得られた結果をまとめると次のようである。

1)内の関係では、①「ハズダ」の予想用法は連体節の中に容認されるものの、その出現頻度も低い一方、食い違いの意味を持つタイプが多数を占めている。さとの意味では現れない。②文脈的状况の面では、既知の段階では、そのほとんどの場合、推論の帰結と現状に食い違いが生じており、後件に矛盾する事態が続く。一方、未知の段階では食い違いが生じないことがわかる。③「ハズダ」による連体節は、推論の帰結と現状に食い違いの有無によって限定の仕方が異なる。食い違いがある場合には非限定的連体節表現となり、主節の事態に対する情報付加を表しており、対比・逆接の関係になる。食い違いがない場合には、限定的連体節表現となる。

2)外の関係では、①「トイウ」が介入しないと、連体節の述部として容認されない。②一方「トイウ」が介入すると、主名詞として主に思考名詞が後接しており、予想用法を示す。「ハズダ」は確言的とは言えないが、自分が知っている事実から推論する結果を述べる表現なので、主名詞として「思考名詞」が後接すると考えられる。検討の結果をまとめると次のようである。

【表2】連体節における「ハズダ」の容認度

	内の関係				外の関係					
	一般名詞	固有名詞	限定的連体節	非限定的連体節	「トイウ」なし				「トイウ」あり	
					発話思考名詞	コト名詞	感覚名詞	相対性名詞	発話思考名詞	コト名詞
ハズダ	○	○	○ 食い違いなし	○ 食い違いあり	×				○	○
	予想用法(○) 食い違い用法(○) さとり用法(x)								予想用法	

【参考文献】

- 太田陽子(2002)「ハズダ」を用いた連体修飾表現について―安全なはずの学校は安全か―
『東京大学留学生センター紀要』第12号、pp.68-73
- 奥田靖雄(1993)「説明(その3)―はずだ―」『言葉の科学 6』むぎ書房、pp.180-189
- 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館書店、p.42、p.57
- 高橋太郎(1975)「「はずがない」と「はずじゃない」」『言語生活』289
- 田村直子(1995)「ハズダの意味と用法」『日本語と日本文学』21、筑波大学
国語国文学会、pp.43-53
- 寺村秀夫(1975)「連体修飾のシンタクスと意味―その1―」
『日本語・日本文化』4号、大阪外国語大学学生別科、
(寺村秀夫 (1993) 157-207に再録)
- _____ (1977a)「連体修飾のシンタクスと意味―その2―」
『日本語・日本文化』6号、大阪外国語大学学生別科、
(寺村秀夫 (1993) 209-260に再録)
- _____ (1977b)「連体修飾のシンタクスと意味―その3―」
『日本語・日本文化』6号、大阪外国語大学学生別科、
(寺村秀夫 (1993) 261-296に再録)
- _____ (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版、pp.265-272
- _____ (1993)『寺村秀夫論文集Ⅰ―日本語文法編―』くろしお出版、
pp.195-196、p.250、pp.269-296
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房、pp.52-59
- 益岡隆志(1995)『日本語の主題と取り立』くろしお出版 pp.139-153
- _____ (1997)『複文』くろしお出版、pp.167-170
- _____ (2002)『複文と談話』岩波書店、pp.113-116
- 松田礼子(1994)「はずだ」に関する一考察―推理による観念の世界とその外に実在する現実の世界を
めぐって―『武蔵大学人文学会雑誌』26-1、武蔵大学、pp.66-75
- 三原健一(1995)『複文の研究(下)』くろしお出版、pp.285-307
- 森田良行(1980)『基礎日本語 2』角川書店、pp.409-411

【用例出典】

1. 朝日新聞記事データベース

(無料記事検索)(<http://www.asahi.com>)

日々と記事出典別の順で示す。以下、記事出典別の略語である。

国際(国)、経済(経)、地方(地)、スポーツ(ス)、社会(社)、文化(文)、ひろば(ひ)、特集
記事(特)、情報(情)、教育(教)、ライフ(ラ)、エンタテインメント(エ)、マイタウン(マ)、ビジネス
(ビ)

2. 青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp>)

芥川竜之介『カルメン』(カ)、和辻哲郎『停車場で感じたこと』(停)、森鷗外『あそび』(あ)、森鷗外『不苦心談』(不)

3. インターネット用例

<http://oshiete.goo.ne.jp/qa/2686479.html>(検索日:2014.8.5)

<http://www.mext.go.jp>(検索日:2014.8.5)

<http://hiroshima-u.ac.jp/nkaoru/Joukyo.html>(検索日:2014.8.5)

<http://www.city.omuta.lg.jp>(検索日:2014.11.5)

<http://www.djp.or.jp>(検索日:2014.11.5)

※例文中、出典の明記がないのは筆者の作例である。

要 旨

The expression of adnominal clauses using "hazuda" shows some difference in its acceptance according to its meaning or usage.

As a result, in the "relative clause", the usage of "yosou" is sometimes allowed within the adnominal clauses, but its frequency of occurrence is less. And the "discrepancy" type occupies most of the cases. The usage of "satori" is not accepted. Also, examining the contextual situation, in the known stage, "discrepancy" between the consequences of reasoning and status quo occurs in most cases and leads to a consequent contradictory situation. On the other hand, in the unknown stage, the "discrepancy" does not occur. The Limiting way is different in the depending on the "discrepancy". Meanwhile, if "discrepancy" exists, it becomes the non-limiting expression of adnominal clauses. If "discrepancy" does not exist, it becomes limiting expression of adnominal clause.

Next, in the "appositive clause", if there is no intervention of "toiu", "hazuda" is not allowed. On the other hand, when there is an intervention of "toiu", the main noun is used the "noun thought".

キーワード : hazuda, adnominal clause, relative clause, appositive clause, toiu,
main noun

투 고 : 2014. 11. 30
1차 심사 : 2014. 12. 13
2차 심사 : 2015. 1. 3